

ツ語講師の傍ら劇作家として活躍するが、一九三二年三月、明治大学文芸科創設に際し初代学科長に招かれる。同年一月から翌年六月まで朝日新聞に小説「女の一生」を連載して好評を得ていたまさにその頃、共産党へのカンパの疑いで逮捕され、執筆を中断せざるを得なくなり次第に執筆も厳しくなっていた。『新潮社七十年』は、山本が「日本少国民文庫」シリーズ創刊に至った経緯を次のように記している。

「たまたまその頃山本は中学生になったわが子に読ませるべき書物を与えんとして、わが国には少年少女の感性の淘汰と知性の訓練に役立つ、人類の進歩に信頼を抱かせるような読物がいかに乏しいかをいまさらのように痛感させられた。巷に氾濫しているのは年少者の頭脳にファシズムを鼓吹せんとする俗悪な伝記類ばかりであった。もともと教育者としての資質に富んでいる山本は、このような俗悪な読物から子供たちを守り、次代のすぐれた日本国民を育成するために、彼自身の手で真に少年少女の精神の糧になるような書物を作成することを決心した。」（『新潮社七十年』新潮社 一九六六年）

かつて新潮社から刊行されていた『演劇新潮』の編集主幹だった山本有三は、その企画を新潮社社長の佐藤義亮に持ち掛けて賛同を得ると早速準備に取り掛かる。吉野源三郎を編集主任とし、吉田甲子太郎、大木直太郎、石井桃子

らに参加させ、山本を中心に五、六十回に及ぶ会議を重ねて綿密なプランを練り上げたという。そして、「少年少女の胸にひびく感動的な読物を与えること、彼らに世界的な見方を教えること、進歩的なものの見かた、考えかたを教えて人類の将来に大きな希望を抱かせること、などが基本的な方針であった」と同社史には記されている。

時代背景を考えると、この一文は戦後になっての作文ではないかと疑いたくなるのだが、そうとばかりはいえない。一九三五年一月、最初に刊行したのが山本有三の『心に太陽を持って』だが、その内容を見ると、まさに編集方針がそのまま反映されているかのようだ。

巻頭には、書名ともなったツェーザル・フライシユレンの詩「心に太陽を持って」が掲げられている。

心に太陽を持って

嵐が吹かうが、雪が降らうが

天には雲、

地には争ひがたえなからうが！

心に太陽を持ってさうすれば何が来ようと平気じゃないか！

どんな暗い日だってそれが明るくしてくれる！